小児科における外国人患者受入れのポイント

目次

01　外国人の小児が増加中

02　外国人小児医療で困った経験の割合

03　外国人小児医療特有の文化・制度の違いで困るケース①・②

04　外国人小児医療特有の文化・制度の違いで困るケース③・④

05　日本にある外国人学校の保健衛生の問題

06　文化・制度の違いも踏まえて、丁寧な説明が重要

07　医療現場における説明の場面で困る事例

08　医療現場における多言語対応の基本の流れ

09　外国人小児の診断には医療通訳者が必要不可欠

10　医療通訳ならメディフォン

外国人の小児が増加中

外国人小児とは、親のいずれかまたは両方が外国出身者である子どものことをいいます。 日本の外国人小児は245,776人で、全国の年少人口の約60人に1人に該当します。

― 東京都や愛知県では1クラスあたり1人外国人小児がいる

※1クラス：平均１学級（40人）あたり外国人小児の占める割合（人）

― 3都府県における外国人小児の割合

東京都		愛知県		大阪府	
中国 …	48%	ブラジル …	36%	韓国 …	37%
韓国 …	13%	中国 …	18%	中国 …	18%
フィリピン …	5%	フィリピン …	16%	ベトナム …	9%

出典：外国人小児の診療・子育て支援（金原出版），2021
出典：出入国管理庁「在留外国人統計」2020年6月、総務省統計局「人口推計」2019年

外国人小児医療で困った経験の割合

言葉以外に、文化や制度の違いに困る事例も少なくない

外国人小児の医療機関の受診数は1か月に1～9人が49.7%、数か月に1人以下が27.1%とさほど多くないものの、文化や習慣など日本人患者とは異なる点が多く、そのため対応への悩みも多く寄せられます。

文化・習慣の違い

36.1%

・宗教上頭を触られたくない
・離乳食など子供に食べさせるものが異なるため、栄養指導で困る

日本の医療システムを知らない

21.7%

・医療保険やこども医療のことなどを知らない
・他人の保険証を提示して、診療を受けようとする

病気への対処方法が異なる

30.9%

・自宅療養の方法が異なる
・再診で経過を観察する必要性を理解しないことがある

発達にかかわる診察の場合、言語や文化が分からないと判断が難しい

出典：外国人小児の診療・子育て支援（金原出版），2021

外国人小児医療特有の文化・制度の違いで困るケース①・②

1 予防接種

ワクチンのスケジュールや種類が日本とは異なる

・自費で受ける予防接種があることを理解してもらえなかった
・予防接種票が何かを理解していなかったため、説明に時間がかかった

例えば、BCGワクチン※については、以下のようなお困りごとも報告されています

※結核を予防するワクチンの通称

・跡が残るので、虐待ではないかと疑われないか心配された
・アメリカではBCGをしないので、必要性を説明するのに時間がかかった

【使えるツール】

外国語版「予防接種と子どもの健康 2023年度版」
https://www.yoboseshu-rc.com/pages/8/

2 急性感染症への対応

発熱時

・熱が下がらず解熱薬が効かないとややパニックのようになってしまう
・結果のすぐ出る協力な解熱薬の処方を希望する

下痢症状

・食事療法をおこないたいときに、出身地により使う食材が異なり、調理方法も日本とは異なることが多々ある
・普段の食事がわからず、指導がやりにくい

渡航医学的な内容

・あまり診療経験のない疾患を鑑別に挙げる必要がある
・日本では症例の少ない感染症について聞かれたり審査を求められたりする
・海外からの帰国者の場合、その国の感染症の流行状況がわからない

出典：外国人小児の診療・子育て支援（金原出版），2021

外国人小児医療特有の文化・制度の違いで困るケース③・④

3 文化の違い

診察時

・宗教上、頭を触られたくない患者さんがいるので、配慮が必要
・女医以外の診察を望まない患者さんに対して、どのように対応すればよいのか迷った
・民族的風習の装飾物を外してよいのか迷う

育児方法

・離乳食の進め方が異なる
・食生活において脂っこいもの、味の濃いものを食べさせる機会が多い

4 制度の違い

医療システム

・医療保険やこども医療のことなどを知らない
・乳児医療証、健康保険証の意味・重要度を知らないため、持参してこない
・受診、入院にお金がかかると思い込み、必要な検査の呼び出しに応じなかった

受診行動

・早期受診する習慣がなく、重症化してしまう
・夜間や時間外に連絡なく受診してしまう

出典：外国人小児の診療・子育て支援（金原出版），2021

日本にある外国人学校の保健衛生の問題

外国人学校では通常の学校と同様の
予防医療の取り組みがなされていないことがあります

健康診断の実施	保健室の設置	養護教諭の配置
約 8 割	約 7 割	約 3 割

※外国人学校には無認可のものも少なくありません。無認可を入れると上記の数値が下がる可能性があります。

健診実施されていないことによる事例

視力に問題があり、メガネによる矯正の必要が発覚。今までは黒板などが十分に見えていなかった可能性がある。

保健衛生に関する常識の違い

外国人(特に職員)に、マスクですら理解してもらうことが難しかった。日々の衛生に対する意識づけの重要性、保健衛生の重要性・意識づけを先生方に理解してもらうことが重要である。

【政府における取組】

外国人学校の保健衛生環境整備事業 全国プラットフォームでは、下記のサイトで外国人学校に対する情報を発信しています。
https://hsfs.mext.go.jp/

出典：専ら外国人の子供の教育を目的としている施設（いわゆる「外国人学校」）の保健衛生環境に係る有識者会議 最終とりまとめ 概要（文部科学省）（https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_19876_s.pdf）

文化・制度の違いも踏まえて、丁寧な説明が重要

文化・制度の違いから
ミスコミュニケーションが
起こる可能性がある

小児科の場合、親の不安も
強く、パニック状態の
場合も少なくない

外国人患児の診療においては、
文化・制度の違いをあらかじめ知っておくことに加えて、

日本人以上に丁寧な説明が重要になります

医療現場における説明の場面で困る事例

医療者から患者に説明をおこなう際に直面する困難

なんでもうなずくが、後で
全然わかっていないと判明する

自分の説明が
理解されているかわからない

日本では子どもには投薬していない
薬であることを納得してもらえない

機械翻訳では正しく翻訳されてい
るか分からないので不安

医療現場における多言語対応の基本の流れ

患者さんの日本語能力と、実際の場面を踏まえて
適切なツールを用いることが重要

	日本語が話せる患者さんなら、まずは	日本語では通じていないと感じたら	医療的な内容や複雑な会話になってきたら
	① やさしい日本語	② 機械翻訳	③ 医療通訳
○	日本語の話せるスタッフなら少しの学習で誰でもすぐ扱える	いつでも手軽に安く使えて便利	ニュアンスや文化・制度の違いも踏まえて通訳してくれる
×	患者さんの日本語能力によっては全く使えない	高度で複雑な場面では、誤訳のリスクが高い（一般会話のみでしか使えない）	前者２つに比べると慣れと手間が必要になる

小児科では医師・本人・親など関わる人数が多くなるため、ビデオでの通訳だとお互い顔が見えて安心

外国人小児の診断には医療通訳者が必要不可欠

厚生労働省のマニュアルでは、**医療通訳体制の導入は、医療安全対策の一環として検討が不可欠**とされています。

医療通訳者とは

医療通訳者は言語だけではなく、文化・宗教・習慣・医療制度等の違いも踏まえて医療者と患者のコミュニケーションを仲介する役割を担います。

01 医療に関する知識

- 身体の器官名
- 機能と疾患、主な病名、検査や薬などの基本的な知識
- 国ごとの医療制度についての知識など

02 言語に関する知識

- 母語と通訳言語のどちらも十分に使える知識

03 倫理観

- 通訳者としての役割
- 責任を自覚すること
- 業務規定や職業倫理にのっとって業務を遂行できること

04 通訳スキル

- 発言者の意図を汲み取り、総合的に発言を理解する理解力
- 話の内容を記憶する記憶力
- ボディランゲージなどを駆使し、聞き手にストレスを与えることなく正確に話す伝達力

引用：医療通訳育成カリキュラム基準（育成カリキュラム実施要領）（厚生労働省）（https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000856701.pdf）

医療通訳ならメディフォン

医療に特化した [医療通訳] ＋ [機械翻訳] サービス

遠隔医療通訳

専門の通訳者による通訳が

32言語・24時間
利用可能

機械翻訳

医療現場に特化したAI翻訳が

最大107言語・24時間
利用可能

文化・制度の違いを理解した通訳者が通訳できる

- ☑ 国内最大級の登録医療通訳者数で最大32言語に対応
- ☑ 安心の医療特化体制で応答率99%・IC/ムンテラも即応
- ☑ 既存の電話回線＋アプリ活用で院内のどこからでも利用可能